第四号：第三十首～第四十三首

おやさと研究所嘱託研究員
深谷　耕治　*Koji Fukaya*

親神の教えはどのようにして広がるのであろうか。それは、この世界がどのようにして救済されていくのかを問うことと等しいが、いずれにしてもそのプロセスの出発点には、親神の教えを知っている者がなく、誰一人真の意味で救済されていないという前提がある。そこで「おふでさき」第四号は、「誰も知らない」ことから始めて、どのように教えが広がるのかを次のように述べる。

「世界には多くの人がいるが、神の心を知っている者は誰もいない。しかし、この度は神が心の底から思っていることを何かにつけて詳しく全て教える。何でも神のひとすじの心が納得できたなら、その思いをいまだ知らない人の知恵や力に負けるようなことはない。

そこで、これからはだんだんと「から」と「にほん」をすっきり分ける段取りをする。これさえ早く分かったことならば、神の残念さも晴々する。そして、神の残念さが晴れたなら、世界の人々の心も皆勇んでくるのである」(四号 30 ～ 35)。

このように「おふでさき」は教えが広まるプロセスにおいて「にほん」や「から」や「てんじく」といった地理的なイメージを喚起する用語を使っているが、ここでわれわれが注目しなければならないのは「から」と「にほん」を分けることの意味である。『注釈』には教えが先ず広まるところとしての「にほん」と、次に広まるところとしての「から」と、それらの概要は説明されているが、上田嘉成氏は「から」と「にほん」について「おふでさき」の用法を参照して次のように考察している。

すなわち、「から」とは、

（1）その真意は容易には分からない、
（2）過去において横暴跋扈してきた者、
（3）将来では親神の絶大なる守護によって対処される者、
（4）将来は「にほん」となる、
（5）将来は「にほん」についで心の澄み渡ってくるところである。

また、「にほん」とは、

（1）その真意は容易には分からない、
（2）過去において蔑ろにされてきたもの、
（3）過去において人智尽力の劣れるもの、
（4）将来は親神の絶大なる守護によって恵まれるもの、
（5）木に例えれば、根にあたるもの、
（6）甘露台を立てるところ
（7）「こふき」の出来るところ
（8）人類の故郷のあるところ
（9）「たすけづとめ」を行うところ
（10）将来は、世界中が「にほん」となる

上田氏は、このように「から」と「にほん」の特徴を示した上で、「にほん」に本質的なものは「ぢば」「甘露台」「こふき」「つとめ」の四つであると指摘している。つまり、この四つの要素が「にほん」にあって「から」にないものであり、「から」と「にほん」を分かつものである。したがって、「から」と「にほん」を分けるというのは、この「ぢば」「甘露台」「こふき」「つとめ」の意義を明らかにすることであるといえよう。そして、将来的にいずれ「から」（と「てんじく」）が「にほん」になるというのは、その四つの意義が世界中の人にとって明らかとなると解される。そこで「おふでさき」では、「から」と「にほん」をすっきり分けて、それらの意義を明らかにする段取りを進めれば、神の残念さも晴れて、世界の人々の心も皆勇んでくると歌っているのである。

それでは、救済の具体的な姿とはどのようなものであろうか。「おふでさき」は次のように描写する。

「だんだんと世界中を真に救ける段取りに掛かる。その後は、病気もせず、死ぬこともなく、弱ることもなく、心次第にいつまでもいてよい。また先では、よほど年限が経ってきたならば、年寄りになることもない。これまでは何の事でも知らなかっただろうから、これから先は全部教えていく」(四号 36 ～ 39)。

「おふでさき」は、このように「病まない」「死なない」「弱らない」という即物的な痛みや悩みの解消を約束しており、さらに、かなり先のことではあるが、「年寄り」にもならないことも提示している。現在の一般的な価値観から考えると、「病まない」「死なない」「弱らない」ことが実現したあとに迎える「年寄り」がどのようなものかは想像を超えているといえよう。

さて、このように「おふでさき」は救済の具体的かつ遠大なモチーフを描いたあと、フォーカスをぐっと実生活に引き戻して、教祖の周辺にいる人々について次のように歌う。

「今までは、みんなの心と内にいる者の心の間に大きな隔たりがあるが、今後は何でも頼んでおくのだが、神の言葉通りに従っていかなければならない。日々身の上に障りがあるなら、そこから神意を悟るように。心得違いを神が知らせているのである。各々の身の上からよく考えて、心を定めて神にもたれよ」(四号 40 ～ 43)。

ここでは「みんなの心」と「内にいる者の心」という表現で人間のあいだで心が揃っていないことを述べられており、その解決としていずれのグループに対しても神の言葉通りに従うようにと諭されている。『註釈』などを参考にすると、この二つのグループはともに教えを聞き分け始めた信仰者、つまり「にほんのもの」といえる。したがって、親神は「ぢば」「甘露台」「こふき」「つとめ」の意義を明らかにして「にほん」と「から」を分けることを提示しつつ、さらに「にほん」のなかで人々の心を揃えることをも促している。そして、親神は人々の身に障りを顕して、心得違いを反省する契機を与えられ、「心を定めて神にもたれよ」と励ましている。

さて、この箇所をもう少し敷衍して考えると、例えば「ぢば」の意義が知的に明らかになっていても、肝心なことは「心を定めて神にもたれる」ことだといえる。後に見るように、「にほん」と「から」を分けることの本義は「から」をやがては「にほん」にすることであり、いずれは世界中が「にほん」になるのであるが、そこで重要なことは、「みんなの心」と「内にいる者の心」とが揃っているということであろう。したがって、教えを先に聞いている者（にほんのもの）が身の上に障りを見せられるとき、教えを聞き分けた者同士が「心を揃える」ことの意味を一考する必要があるといえる。